



寿都漁港（寿都町）

道経連会報 No.292

CONTENTS

巻頭言	1
Team Sapporo-Hokkaido 活動紹介	2
第50回定時総会・第99回理事会・ 記念講演会	5
常任理事会レポート	25
駐日各国領事等との意見交換の 実施	26
会員企業紹介	27
会員の異動	29
新会員企業紹介	31
グループ活動報告	34
北海道の経済動向	42
人事・労務相談日	44
道経連カレンダー	45
事務局人事	45
わがまち紹介（寿都町）	46



北海道経済連合会 常任理事

上坂 牧夫

雪印メグミルク株式会社

執行役員北海道支社長

兼北海道支店長

北海道酪農とともに100年、次の100年に向けて

雪印メグミルクの歴史は今からおよそ100年前、関東大震災を契機とした乳製品不況のあおりを受けた北海道酪農民が、北海道酪農の父とも呼ばれる宇都宮仙太郎や、北海道開発と寒地農業の確立に生涯を捧げた黒澤酉蔵らを中心に、自らを救うべく農民自身による生産組織として1925（大正14）年に立ち上げた北海道製酪販売組合（翌年に北海道製酪販売組合連合会：通称「酪連」）に遡ります。

北海道酪農の歴史は、明治時代の開拓使設置に遡りますが、実際に北海道開拓の政策に酪農振興が反映されたのは、1921（大正10）年に第16代北海道庁に宮尾舜治



【宇都宮 仙太郎】



【黒澤 酉蔵】

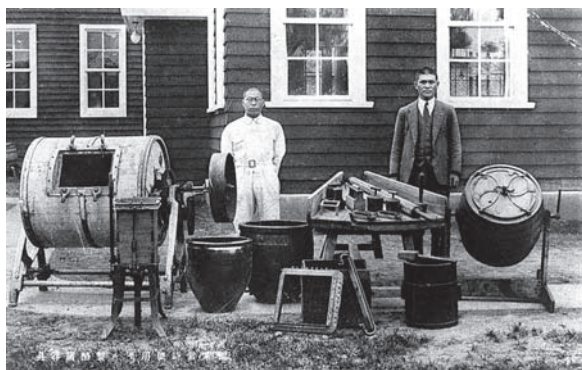
長官が着任してからになります。当時北海道農業は開拓以来の長年の略奪農業や戦争特需に乗じた単作・連作による投機的作付けの影響により地力の低下が問題となっていました。そこへ数年おきに強い冷害が襲う訳ですが、本州型の穀菽(こくしゆく:穀物や豆類)農業ではこれに耐えられず飢餓が発生するほどの凶作を招くような事態でした。北海道は日本の食料供給基地として期待されていたにも関わらず、こうしたギャップが課題となっていたのです。

そこで着任したばかりの宮尾長官に、宇都宮や黒澤など後の酪連創業の中心メンバーが「デンマーク農業を模範とし、酪農を中心とした農業への転換」を進言し、宮尾長官はそれを受け入れて「北海道を以って本邦のデンマークとなさざるべからず」と説き、いわゆる宮尾農政で北海道における酪農振興を進めたのでした。そうして酪連は創立以降、道と一体となって酪農を育て、酪農を担う人材の育成、牛乳・乳製品を通じた健康・栄養の提供に努めてきました。

北海道が手本としたデンマークの農業は、畜牛・輪作・甜菜の3つを基軸とし寒地に適した合理的な農業スタイルであり、かつ酪農そのものは人が食べられない草を牛が食べ、乳を出して人に食料を提供し、さらには糞尿

が堆肥となって大地に還元され大地を豊かにするという、まさに現代のサステナビリティに通じる循環型の農業です。創立者の一人の黒澤西藏は「健土健民」という言葉で、農業を根幹に据えた健康な国土の保全、そこから生まれる健康な食料による健康な国民の育成、そして国家安定のための食料自給の重要性を説き続けました。

雪印メグミルクは、来年創立から100年を迎えます。黒澤西藏が終生唱えた「健土健民」は、現在我々の創業の精神として位置づけられています。時代の変化とともに社会の課題や要求は変化していきますが、100年前、酪農によって当時の課題克服に向かった創業者たちの精神を引き継ぎ、雪印メグミルクは、次の100年に向けて、これからも「食」を通じて社会課題の解決に取り組んで参ります。



【大正14年バター製造を開始】
札幌郡白石村大字白石字野津幌（現：厚別区上野幌）



【「循環農法」の概念図】



【黒澤西藏直筆の「健土健民」(酪農と乳の歴史館所蔵)】